

## 角乗り

細田木材工業(株)  
顧問 細田安治

先月号まで国道16号線のご紹介をしてきたが、今月号は、木場の伝統である「角乗りの演技」をご案内します。ご存じ角乗りとは、木場職人の花形である川並さんの二大技能のひとつ、即ち、のどを競う「木遣り」とならんで、身軽さを競う「角乗り」でいずれも、丸太や角材を長いタメ竿という鳶口一本で、水に浮かぶ木材を自由自在に操り、筏組みや、回漕<sup>かいそう</sup>等を生業<sup>なりわい</sup>とする、皆様ご存じの川並さんだ。

川並さんたちは、やっと浮いている角材(丸太も当然ある)を巧みに操って仕事をする。この時唄うのが「木遣り唄」だ。角乗りとは文字通り、角材を操る仕事だ。

木場には「角乗り保存会」と称する会が現存し、月一回木場公園南広場のプールで稽古に励んでいる。角乗り保存会の会長は加藤元一さん、副会長は宮下實さんで会員30人ほどで伝統を伝えようと頑張っている。毎年10月の江東区民祭りには大勢の見物客を集め「角乗り」の演技で名人芸を披露している。筆者も「木材や」のはしくれとして、また製材屋の息子として、いやおうなしに川並さんのまねごとをした経験から、懐かしく楽しみで毎年角乗りを見物し、昔を思い出しているところである。

### ◇木場の角乗り

はじめに、300年の歴史と伝統を誇る木場も時代とともに変わり、昔の面影を今に伝えるものは少なくなった。こうしたなかで「木場の角乗り」は昔の面影を伝える数少ないもののひとつである。

#### ・無形文化財

タメ竿といわれる竹竿で調子を取りながら水中で角材を回転させ、技を演じる木場の角乗りは、1952年(昭和27)11月に、東京都の無形文化財に指定された。門前仲町1丁目の黒船橋下の大横川で行われる角乗り大会に、数千人の見物客が押し寄せ大賑わいを見せた。東京港祭りの呼び物の一つになっている。

#### ・角乗りの由来

角乗りがいつごろから川並の間で行われるようになったのは定かではないが、江戸時代の初期には、既に行われていたのではないかとされている。

角乗りは川並の余技として生まれ、それが工夫改良されて今日に至っているが、日本全国数ある筏師の中で角乗りのできるのは木場の川並だけである。そう言う意味では、木場の角乗りは日本の角乗りといっても過言ではない。

#### ・名古屋の一本乗り

木場の角乗りと似たものに、名古屋の丸太一本乗りがあり、名古屋市の無形文化財に指定されているが木場の角乗りとの違いは、材料の「角材」「丸太」の違い、「演技」と「競技」の違いである。

木場の角乗りは、「演技と品格」を求められるのに対し、名古屋の「一本乗り」は競技を優先としている。

## ・歴史

角乗りが行事として行われるようになったのは、明治初年の頃、浜町河岸で行われた水防出初式が最初といわれる。その後1897年(明治30)アメリカ大統領・グラント将軍来日の折、上野不忍池で角乗りを披露、更に横須賀での軍艦進水式で明治天皇の天覧の荣誉に輝くなど、角乗りは郷土の文化として広く一般に披露されるようになった。

しかし、こうした輝かしい歴史と伝統を誇った木場の角乗りも、軍事がすべて優先の大東亜戦争で中断された。

## ・戦後の再開

1948、1949年(昭和23、24)頃の木場の業界は戦後の混乱からようやく安定し、伝統と歴史のある角乗りを復活させようと関係者が話し合い、東京木場筏業組合、東京港労働組合が主催、東京都および、港祭協賛会の後援を得て、東京港祭りの最終日に当たる八月十七日午後一時から三時まで、東京都長官、運輸省、海運局、労働局、水上警察、一般民間人、多数を招待して、東京港芝浦会館前で行われたのである。

## ・木場の海軍堀で復活

そして、その年の十月十七日には、地元木場の海軍堀で角乗りを開催したが、当時は角乗りの使う角材がなく、わざわざ、モミ、ツガ材を角材に製材して演技を行ったと言われる。当時は「角技会」と呼ばれていた。海軍堀とは嬉しいが、筆者は都立三商(旧制中学)2年～3年の頃だ。懐かしいが残念ながら見物した記憶がない。

## ・保存会の設立

1952年(昭和27)9月角乗りの技術と保存と育成を目的に「角乗り保存会」を設立、東京都教育委員会より「都技芸」木場の「角乗り」として、東京都の無形文化財に指定された。そして、1964年(昭和39)十月三日、富岡八幡宮の境内の東側に、「木場角乗りの碑」を建立した。碑には角乗りの由来が次のように記されている

## ・碑文

木場の角乗りは三百余年の昔、徳川幕府から材木渡世の免許を与えられた業者の材木を扱う川並の祖先の余技として進展し、若者の技術錬磨の目的をもって今日に伝わるものである。中略、横須賀において軍艦進水式の折、明治天皇の天覧を賜る。後略

## ・角乗の材料

角乗りに使用する木材(角材)はその昔モミ、ツガが使用されていた。しかし、近年入手が困難となり外材の米松を使用している。寸法は、長さ5メートル、30センチの角材で、角乗り専用で作っている。ここで、角乗りに使う材料については、ただ単に5メートルの角材を30センチ角に製材すれば出来上がりではない。角材が平均5メートルの長さで水に浮くために、材料の選別が最重要だ。5メートルの長さに芯が通っていなければ水面の安定を保てない。そこで材料の選別が重要課題の一つである。

芯を通すためには細い材は論外、太くなければならない。しかしここで難しいのは、ただ太ければ「よい」とは言えない。太ければ「芯」が出来すぎ強度が失われているので落第だ。一定の太さで、

芯が通り、水面に平均に浮かんでいなければ失格だ。このように、材の選定が重要課題である。関係者が先ず頭を痛めるのが材料の選定だ。前述の海軍堀で使用した角材は果たしてこの基準をクリアしていたかどうか。である。川並さんは大変な思いをして角乗りを披露したのではないだろうか……。

#### ・大事なのは潮周り

こうしたところにも時代の移り変わりをみることが出来るが、日常川並が扱う木材も、内地材から巨大なラワン材が中心となり、角乗りの環境が悪くなっていることは否定できない。

角乗りは真水と塩水とでは乗り方が違うと言われているが、河川などでは水の動きが少ないとき、つまり小潮時刻を選んで演技が行われる。

#### ・後継者の育成

現在、木場には四百人近くいるが、角乗りのできる川並は約三十人。一割にも満たない。角乗りのできる川並は貴重な存在と言っても過言ではない。初代角乗り保存会加藤忠次郎会長の「いつまで継承できるか……。」と心配するのも無理からぬ話である。

東京木場筏の子安<sup>こやす</sup>氏は、「会社に若い衆が約八十人いるが、角乗りのできるのは八人位しかいない。もっと一生懸命に練習してもらわねば困るのだが、それを指導していくのが大変だ。興味があっても、素質がなければ上達しない。それに昨今はほかにいくらでも遊びがあるので……。」と嘆いている。

角乗りは川並の技術の基本でもあり、技芸はだれかが守っていかなければならない。しかし、このままでは角乗りのできる川並は段々少なくなり、古老たちの心配が現実のものになりかねない。木遣りと共に木場が生んだ深川文化を絶やさないためにも、積極的な対策が望まれるわけである。

### ◇角乗りの種類

ここでやっと、角乗りの演技の種類が出てきた。先を急ごう。

#### ・地乗り

角乗りの技は大きく分けて十二種類前後あるが、最初に行われるのは基本型と言われる「地乗り」である。タメ竿と言われる竹竿をもって素足で角材に乗り、竿で調子を取りながら角材を回転させる。終わると角材の七分三分のところまで逆立ちをする。

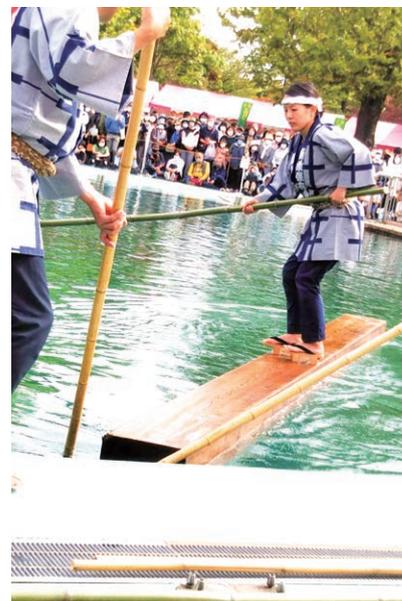


## ・相乗り

次に行われるのが「相乗り」二人一組で一本の角材に乗りそれが正面に向かって左右二組でおこなう。どちらか上手な人がリードするようになるが、二人の意気がびったり合わないと、角材が上手く回転しない。それが終わると二組の四人が揃って逆立ちするが、初めと終わりが揃わなければいけない。

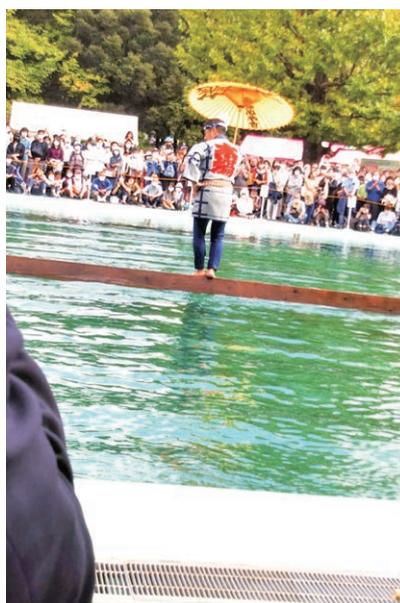
## ・駒下駄乗り

「駒下駄(こまげた)乗り」は、読んで字のごとく「駒下駄」を履いて角材に乗る。下駄の歯が上手く角材にかからないと回転しない。「駒下駄乗り」がうまくこなせると、次は「高下駄」に移る。「高下駄乗り」は下駄の歯が高いだけ難しくなる。



## ・からかさ乗り

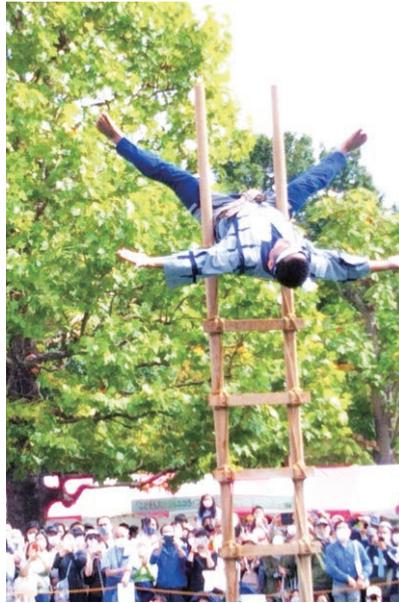
「からかさ」乗りは、タメ竿の代わりに番かさをもって角材にのる。真ん中に出たところで傘を「パット」開く。そして、傘を回転させながら角材を回転させる。タメ竿を持っていないため安定が悪く、ちょっとした風にも影響される。



## ・梯子乗り

「梯子乗り」は、角乗りの中でも呼び物の一つである。地上で行われるトビ職

の「梯子乗り」は四方八方から、トビ口で梯子を安定させるが、角乗りのそれは柁のような形の字形の土台が角材と梯子をつなぎ、わずかにタメ竿が土台の横から水面に浮かんでいる程度にすぎない。これを安定させるのは、角材の両端に乗っている助演者が手にしている二本のタメ竿である。演技は三人が交互に行い、「八艘(はっそう)」「遠み」「八艘」「背亀(せかめ)」「腹亀」「腕だめ(腕だめし)」「吹き流し」「一文字」と進み「膝とめ」「蜘蛛の巣がらみ」で終わる。



### ・一本乗り

梯子のかわりに、丸太を一本立て、丸太を四方から竜頭りゅうずと呼ばれる手拭を輪結びにしてある。これは鐘の竜頭に似ているところから来た名前で、丸太に桧を使う。出演者は梯子に乗りと同じように三人交互に行うが、梯子と違って竜頭が頼り「猿の桃くい」「一本背亀」「一本腹亀」途中で胡坐をかき体をそらして、両手を広げる「だるま返し」足を丸太に引っ掛けて体をそらす「象の鼻」等だ。ここで字数尽きた。

次回に繰り越す 続く

